

## 金峯山・母狩山

日本山岳会 山形支部

朝日連峰北西端から北に伸びてくる尾根がある。摩耶山、湯ノ沢岳、母狩山、鎧ヶ峰と続き金峯山(キンボウサン)で庄内平野に吸い込まれている。これらの山々は、かつて修験道の舞台であり、中国廬山への憧れからか五老峰の呼称も残っている。

城下町鶴岡の街づくりの際には、金峯山と母狩山は鳥海山と共に「山当て」、遠望できるように町割りがされていたという。金峯山は地元小学校の遠足に組み込まれ、地元料亭の盃には「金峯在杯」と記されるなど、鶴岡の人々にとっては時を越え、朝な夕なに眺めて、日常生活に溶け込んだ山であり、人々は親しみを込めて「きんぼうやま」と呼ぶ。

標高 471m の金峯山は、671(天智 10)年、修験道の開祖と仰がれる役小角(エンノオスヌノ)によって開山され、金剛蔵王権現を祀ったといわれている。

古くは山頂を「仏」、麓の丘陵を「蓮華」に見立てて蓮華峰、あるいはハスの八枚の花弁を放射状に並べたものを「八葉」ということから「八葉山」とも呼ばれていた。

承暦年間(1077~1080)、丹波守盛宗が出羽国に移るとき、奈良吉野の金峯山(キンフセン)を勧請してから金峯山(キンボウサン)と改めた。江戸時代には庄内藩の祈願所として栄え、神仏習合時代には母狩山から摩耶山まで真言宗の修験道場となった。そして、明治の神仏分離にあたり 1870(明 3)年に御嶽(ミタケ)神社、1877(明 10)年には金峯神社に改称した。

金峯山は、鶴岡の人々にとっては幼いころから関わり続ける故郷の山であり、白く染まるのを見て本格的な冬の到来を知るなど暮らしと重なりあう山である。登り口は東に青龍寺口、滝沢口(中の宮で青龍寺口と合流)、北の金峰少年自然の家口、西に湯田川(藤沢)口などがある。加えて、中の宮の社務所前まで車道が通っていることもあり、365 日誰も登らない日は殆どないほど慣れ親しんでいる「民の山」である。

青龍寺からの参拝路は、老杉の下の苔むした碑石や史跡を眺め、木の根が重なり合った階段を踏みしめて登る。車道の終点、社務所前には神仏に供える神聖な水が開山以来岩間から湧き出ている閼伽井(アカイ)の清水があり、渴いた喉に心地よい。

中の宮(如意輪観音堂)では主祭神の恵比寿様と大黒様が迎えてくれる。米と魚に関係深い福の神であり、日本人の食卓の基本を司る神でもある。

金峯山の催事の多くは雪中で行われ、近隣遠方からの参列者で賑わう。1月1日の元旦祭で、天下泰平、万民快樂の祈願を行う。1月4日厄払祭は厄年の人の厄難消滅祈願、2月27日雪灯籠祭と翌 28 日の山開祭は、初山詣り、縁結び、良縁成就を願う。そして、12月31日

は庭燎祭(テイリョウマツリ)(綱取祭)と大祓式で1年間の罪祓い、歳夜祭、火難消滅と続く。

なかでも、雪灯籠祭は、伝統ある金峯山の山開きに合わせて行われる。雪の参道を多くの男女が手を取り合いながら登り、結ばれたことから、またの名を「縁結び祭り」といわれている。麓から神社までの雪灯籠の灯火に導かれ、ライトアップされ夜空に向かい天高く浮かび上がる大黒様の雪像は神秘的な雰囲気醸し出す。願い事をこめて明かりを灯せば、良いご縁や願い事が叶うとされている。そして、翌2月28日の山開きは、崇敬者の家業、生業繁栄、商売繁盛、良縁、進学、諸願成就などをお祈りしている。

中の宮から登り始めると、地面が金粉をまいたようにキラキラと輝いているのが目に留まる。砂金と間違われやすい金雲母(キンウンモ)で、この付近の花崗岩に含まれていたものが剥がれたものである。中の宮から山頂にかけての地質は硬い花崗岩で「金峯石」と呼ばれ、庄内藩鶴ヶ岡城の石垣、近郷集落の墓石に用いられたと聞く。修験の山ということもあり、標高に似合わず急坂、露岩が続く。

老杉の根で持ち上げられたのか不規則に傾き、苔生す石畳が現れると山頂であり、入母屋造りの重層建築の金峯神社本殿(蔵王権現堂)が見えてくる。山頂の北側を回り込むと丸太のベンチが設置された一望台で、三等三角点(459m)がある。その先に庄内平野、鶴岡の市街地が飛び込んでくる。西に高館山、北に長い裾野を伸ばした鳥海山、北東に丁岳、立谷沢の奥に下柳沢山、そして虚空蔵岳から続く月山、湯殿山まで望まれる。

金峯山から鎧ヶ峰への路は、林間の中に伸びている。春から夏にかけてはグリーンシャワーに浴し、秋は落ち葉の絨毯を踏んでの遊歩道である。標高は高くないが、月山、鳥海山そして庄内平野を眺めながらの尾根筋である。ピークを2つ越えると566mの鎧ヶ峰である。

山頂には「次三角点」が見られるが、金峯山にある国土地理院による位置を測量して、正確な地形図作成するためのものとは異なる。かつて、農商務省山林局で国有林の境界や面積を求めるために三角測量を行っていた時の三角点で、上部がイギリスパンのように膨らみがある。2.5万分の1地形図に鎧ヶ峰の山名は記入されていないが、ドーム状の頂から大きな月山の全容を捉えることができる。残雪の月山の前には赤川の扇状地が広がり、その背後に楡引の里山を見ていると、日本の原風景に心が和む。

ここから母狩山までは200m下り、400mの登りである。「ほかり山」に与えられた漢字は何とも不穏であるが、鎧ヶ峰と共に地元言い伝えが残っている。

今からおよそ950年前、前九年の役で敗れた安部宗任が、母を探して鶴岡近郊に来たことに由来する。陸奥を離れこの地に逃れ住んでいた母と無事再会を果たした。母を連れ京に出て再起を試みようとするが、平穏な生活を望む母から断られる。宗任も志を断ち、近くの山の洞窟に鎧を奉納し、世の平安を祈願し、里の背後の葉分山(ハクヤマ)を母狩山、鎧を収めた峰

を鎧ヶ峰と言うようになったという。

母狩山への登山は谷定から高見台経由と、金峯山から鎧ヶ峰経由と湯ノ沢岳からの尾根路の三つのコースがある。金峯山と母狩山一帯は、1,000mにも満たないが、海岸から10数kmの距離のため地元では「金峯降ろし」と呼ばれる強風が知られ、降雪と共に特異な吹溜りを形成する。そして、降水量は年間2,000～2,500mmに達し、ブナやナラの原生林を育んできた。

母狩山は、かつてブナに覆われていたが、山頂付近や痩せ尾根の一部を除き大部分は木炭用に伐採され、その跡にナラやマンサクなどが生えている。ブナは山裾近くまで生えており、谷定に見事なブナ林があったことで知られる。ブナの木の空洞にブッポウソウが住み、北限の繁殖地として県の天然記念物の指定を受けていた。このブナ林は、庄内柿や孟宗竹、スギの二次林に変わり、ブッポウソウは姿を消し、県は指定を解除した。

一方、金峯山は、ブナの他にキタゴヨウマツとアカマツが見られる。山頂付近には航行の目標林としてスギが植えられているが、参道沿いには江戸時代に崇敬者から寄進されたスギの巨木が茂る。稜線の東側は積雪が多く、雪の下で冬を過ごすユキツバキやスミレなどの山野草が多いことでも知られている。

豊かな自然の残る金峯山と母狩山は、暮らしと文化と歴史を溶かし込んで人々と今なお深くかかわり続ける山々である。

<文責:支部長 木村喜代志>

#### <参考文献>

- NEXT—特集—庄内の山々 Vol.3 庄内広域行政組合
- ブナの森 片山 正和 著 東北出版企画 (1986)
- 赤川流域の暮らしと文化 「赤川流域の暮らしと文化」編集委員会  
建設省東北地方建設局月山ダム工事事務所(1996)
- 庄内ふるさと大百科 郷土出版社(2006)
- 鶴岡市金峯山 金峯神社 ホームページ
- 1/2.5万地形図 国土地理院 (1998)